

「自由の天地」の原風景に集う

幸恵を世界中に発信

フォトジャーナリスト吉田ルイ子氏が講演



知里幸恵

樋口みな子

九月十八日、『アイヌ神謡集』を一冊残して十九歳で亡くなった知里幸恵（1903年〜1922年）から学ぼうと、幸恵さんの出生地・登別市でフォーラムが開かれました。主催は知里森舎（横山むつみ代表）です。

午前中は、幸恵さんの生まれ育った川や、山を訪ねるアイヌ語地名フィールド



知里幸恵の墓前で、左から、吉田ルイ子、横山むつみ、筆者、小野有五の各氏

9月18日、登別市で

ワーク。五十人で散策し、さんの墓参りもしました。金成マツさんと、知里幸恵 東京にいた頃、幸恵さん

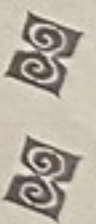
知里幸恵フォーラムin登別

は登別を懐かしむ日記や手紙をたくさん残してあります。そのひとつが、ヨカチペ（岡志別）川でした。

「私の耳に響いてくる音律はヨカチペ川のサラサラサラサラとのこりくる…」の詩そのままにヨカチペ川はあり、幸恵さんの望郷の思いに胸が熱くなりました。

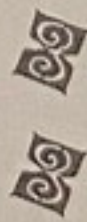
今は姪の横山むつみさん夫婦が暮らす、幸恵さんの生地は、栗や、カラマツの大木がどっしりと根を下ろしていました。今回の台風で数本のカラマツが倒れ、風速五十メートルの恐ろしさを感じました。幸恵さんが遊んだ栗の木が今も元気に育っていて、私たちを見守っている

るかのようでした。



午後からは、フォトジャーナリスト吉田ルイ子さんの講演、吉田さんと北大教授の小野有五さんとの対談があり、登別市民だけでなく、東京、京都、千歳、旭川、白老、札幌など各地から二百人が集いました。横山むつみさんが、『アイヌ神謡集』の序文を朗読して講演に入りました。

「私でもアイヌだ…同じ人間ではないか、私はアイヌであったことを喜ぶ」と日記に残した幸恵さんの生き方を、日本だけでなく世界中に発信すべきだと語り、「幸恵さんのエコロジカルな見方を物質文明を見直す原点として紹介して行きたい」「知里幸恵をアメリカ、オーストラリア、シベリアなど世界のマイノリティーに発信したい」と結びました。



吉田ルイ子さんは室蘭の出身。「大正の時代、マイノリティーである幸恵さんの生き方が、私自身の生き方にもつながる」と語りはじめ、小学生の頃、心やさしいアイヌの少年がルイ子さんにスズランを摘んでくれたエピソードを紹介。アイヌ、アイヌと、いじめにあっていたこと、アイヌの人たち家族の温かさが忘れられない原体験だと語りました。幸恵さんの業績は、金田一京助氏の影に隠れがちだが、もっと評価されてほしいはず、「私はアイヌだ、ど

小野有五さんとの対談では、写真を始めたきっかけや、どんな写真を撮ってきたかが語られました。水俣病を告発した写真家のユージン・スミスの、生命の誕生の瞬間を捉えた一枚の写真のとりこになって、フォトジャーナリストの道を歩むことになったこと、写真を撮るとき、最も大切にすることは被写体との心のコミユニケーションであること、撮られる人がいい写真だなと思う写真を撮りたい

と語りました。ハーレムなどでの取材では、体が小さかったこと（百五十センチ）、アジア人であったことで安心感を持たれたと語り、小さな体で世界六十九カ国を歩いたエネルギーが素晴らしい、感動しました。名前の由来が人類愛のルイと聞き、納得しました。

会場を訪れていた中本ムツ子さんのカムイユカラ（神謡）、大須賀るえ子さんのヤイサマ（即興歌）も思いがけなく聴くことができました。